

## 戯曲「女川飯田口説」

### 前書き

口説（くどき）とは平家琵琶、謡曲、浄瑠璃、長唄など、音曲に載せて物語る演芸一般を指す言葉だそうです。女川飯田口説（おながわはんだくどき）は宮城県に伝わった口説で、江戸時代の中頃に実際に起こった「密通・主殺し（夫殺し）・逃走・捕縛・処刑」の事件を題材にしています。犯人は殿様・飯田能登を殺害した妻・節と日塔喜衛門という家臣です。この事件は当時の仙台藩領内ではセンセイショナルな出来事であったと思われる。

昭和二〇年代までには宮城県にこの口説を実際に歌う男女の方々がいたそうです。宮城県図書館には昭和六〇年発行の「CDみやぎの民謡」があり、そこに最後の伝承者・千石恒雄氏の口説が録音されていて、実際の口説を聞くことができます。第一段から第五段まで約五〇分かかるようですが、第一段のみが収められています。

この口説は、仙台藩と武士階級への批判を許さぬ当時の社会にあつて、多くの「言えないこと」を背後に持ち、また演芸として大衆の興味を引きつける必要から、かなり曲飾されているであろうことが想像されます。しかし実際に起こった犯罪事件として、判決の公式記録や被害者の検死記録が残り、捜索に協力した人々に報奨金を与えた時の書類や、逃亡した二人が残したと伝えられる衣類・装飾品が気仙沼や陸前高田などに保存されています。

不思議に思われることは捕縛地で、釜石と小国の二説があり、口説では釜石で捕縛されたことになっています。しかしそこから山を越えた小国には喜衛門の名前をつけた用水堀が今も残って使われており、

現地には信ずるに足る伝承もあり、二人がそこまで逃げて一時期暮らし、そこで捕縛された可能性があります。またお節が仙台藩と南部藩の藩境を超えるとき二人を泊めて世話してくれた夫婦にお礼に置いて行った小袖と、お節が牢獄で刺繍したという「松葉曼荼羅」の二つは、それぞれ別のお寺に保存され、後者は年一回、二人が処刑された日（命日、十一月三日）に公開されています。

この事件は江戸時代半ばの古い事件でありながら、物証と伝承がかなり残っていて、日本各地で歌われた口説きの中で、最後まで残った稀有なものだと思います。女川村は現在の漁港・女川町とは異なる、石巻市に合併した旧河北町にある集落で、町役場に勤めておられた武山文衛氏は若い頃からこの事件に関心を持ち、この事件について研究されてきました。武山さんと共著で、この事件の伝承と史実について書いたものを『仙台郷土研究』（平成二十七年六月、通巻600号）に発表しました。ここに記した戯曲「女川飯田口説」は、その論文といくつかの研究書を元に、素人の私が創作したものです。（仙台郷土研究会・会員 加藤純二、令和三年三月）

### 第一幕

時―天明元年（一七八一）春。

所―伊達藩領石巻に近い北上川ぞいの集落の小さな家。右手に按摩師・河庵が、腹ばいになった年老いたヤクザ・仙吉の背中、腰のみみ療治をしている。仙吉の背中には入れ墨が彫つてある。按摩師・河庵は目が見えない。左手には北上川とその土手。第一幕の後半に口説の第一番が流れる。

河庵「仙吉親分、ワシには見えないが、これは鍾馗様の彫り物だね。

さわりや分かる。」

仙吉「若い時にや、片肌ぬいで人足や漁師たちを統率したもののよ。しかしこう足腰が弱って、体にシワが寄っちゃあ鍾馗様に申し訳がねえ。もうおまえの針灸ともみ療治だけがたよりさ。」

河庵「ところで旦那、旦那はいつとき十手を握ったことがあるって聞きましたか。」

仙吉「ああ、三〇年くれえ昔のことだ。例の飯田の殿様が切り殺された時のことよ。仙台からお役人たちが来て、どうしても逃げた奥方のお節様と家来の日塔（にっとう）喜右衛門をひつとらえなくちゃならないと。突然の事だ。二人は逃げるたつて旅姿を整えた訳じゃあねえ。それに街道を逃げたら目立つ。結局、山道さ。旅籠には泊まれないから野宿だ。こういう時には、山道を知っていて、乞食頭（かしら）に顔が利く、俺みたいな地元のヤクザが必要なんだ。女川村に居合わせた俺が、そういつたことで、捕り物の先導をおおせつかった訳よ。仙台から来た御町同心二人とお小人（おこびと）三人に加えての「臨時のお小人」の扱いだつた。十手を持ったのはその時のことさ。だがあの時おれは、二人が捕まらなければいい、逃げおおせてくれと、心の中じゃあ始終、横山観音様にお祈りしていた。これは内緒の話だが、口ではあつちが怪しい、こつちが臭いと、お役人たちにだいぶ無駄足ふませて歩き回つたものさ。」

河庵「あの時の本当のことを知っていなさるの、今は親分だけかも知れない。実はあつしはめくらの稼業で、琵琶を弾いて、祭りの時には小遣い銭の稼ぎもしておりやす。平家だ源氏だと物語を語りやす。しかし話の種はそうあるじゃなし、清盛、弁慶ばかりもやっていられない。この間の江泉寺の縁日に、ついでの余興にあ

の飯田の殿様殺しを口説でやってみたんだ。すると聞いていた村の衆の目の色、いや熱気がちがつたね。もう一回というんで翌日、またやったのさ。そしたら昨日と今日とは違う、話がいいかげんだと怒られたね。清盛、弁慶の時は、話の筋を間違つても気にもしない連中が、口説の筋を覚えてしまふんだ。これは話の筋をきちんと作らなくちゃなんねえと思つたよ。親分、その殿様殺しのウソのないところを初めから終わりまで、あつしに聞かせてくれないかね。その代わりと言つちや何だが、針灸、もみ療治は半値ということでもいいよ。」

仙吉「本当のことを話すとお上がうるさいぜ。皆に聞かせてはならないことも多いんだ。まあいいや。半値といやあ、おれも助かる。それに本当のことを腹に収めたまんま地獄に行くのも気になつていたんだ。教えてやろうじゃないか。」

（少し、間をおいて。遠くに祭り囃子の音が聞こえる。）

仙吉「あれは女川村の薬師神社の春祭りの前の晩だつた。おれは石巻から女川村のそのお祭りに縁起物売りに来ていた。夜祭りがあつて、翌朝のことだ。殿様が殺されているつていう噂が密かに村中に流れたのよ。家中のお侍がみんな青くなってヒソヒソ相談さ。何でも、殿様の奥方のお節様と日塔喜右衛門という侍がいなくなつたと。殿様を斬り殺して、二人で逃げたことは一目瞭然だつた。俺が思うに、家中のお侍の方々は、お家の一大事、どうにかしてこれを殿様が病死したことにして、内々に済ませたかつた、と思ふのさ。しかしこのことは口説には入れられないよ。」

河庵「しよっぱなから本当のことが口説に入れられないのは困つたも

んだ。まあいいや。」

仙吉「喜右衛門とお節様は腕が立つ。お節様は薙刀のご師範がお相手するのを嫌がったほどの腕前だ。捕らえようとして、斬り合いになりゃあ、家中に死人やけが人がでる。まずは二人を見つけ出して、事情を聞いて、説得し、なんとかお節様だけでも村へ帰ってもらって、お殿様は病死、喜衛門は行方不明として、処分を小さくしたかったんじゃないのかな。」

村には道は一本。下るか、登るかだ。あとは山道が二本。翁蔵山を越えて気仙浜街道へ出る道と、もう一本は反対の山道で柳井津に向かう。数人の家中の侍それぞれに百姓衆をつけて追いかけさせた。どこか近所で自害しているかもしれないと屋敷の周辺も探したんだ。これが時間つぶしになっちゃった。どこに行っても、だれもそんな二人は見かけねーとき。茶屋で聞いても、道ばたの乞食に聞いても、だれも見かけないとき。それで引き返して、またヒソヒソ相談さ。そのうち死体は腐るし、噂は広がる。もうこ病死も喜右衛門ひとりの犯行も無理な相談となっちゃった。仕方なく仙台に早馬さ。届けが六日も遅れたのが、家中の方々に迷惑があったという証拠さ。口説にこれを入れれば、この口説は女川村の飯田家中が許さないとと思うぜ。だけど、河庵、おまえにだけは本当のことを話しておくよ。」

河庵「届けが遅れて、家老や家臣におとがめがあったんだろう。」

仙吉「もちろんよ。あとでご処分がくだってらあな。それと「家中の者は、二人の不義密通を知っていたか」と詰問があるだろうと、「全く知りませんでした」で口裏を合わせた。もちろん、二人の間には手紙なんか残っていない。上の殿様の屋敷とすぐ下が喜衛門の侍屋敷だ。おれの想像じゃ、二人は蠟燭の明かりで合図した

のさ。おれは喜右衛門が水路を作るときの堀の傾斜を決めるやり方を見たことがある。夜、提灯を使ってやるんだ。提灯の動かし方を決めておきゃあ、一里離れていたってこまかな指示ができる。隣の家どうしだ。夜ばいや逢い引きの手はずは、蠟燭の明かりでやれば簡単なことさ。めくらのお前はどうかやった。」

河庵「おれたちや音の合図さ。まあ、そんなことはいいやね。早く続きを話しておくんな。」

仙吉「ハハハハ。飯田家は古くから伊達家とご親戚の家柄なんだ。だけどお殿様は女あそびと酒好きだった。お節様が嫁入りされてすぐの頃、せつかく小姓頭まで上がったんだが、お城勤めを辞めたんだ。女川村に帰ったらそばめを二人困ったとき。」

河庵「そんな贅沢ができたのかい。」

仙吉「仙台のご城下じゃあ何かと人目がうるさかったんじゃないか。それにお節様は気位が高く、殿様は近寄りがたかったんじゃないかな。結局、お節様はいらぬ花よとほおっておかれたのだ。殿様は妾二人でも足りない、家中の侍の妻子までお酌にださせる。みんな心の底じゃ、お節様に同情していたさ。喜右衛門は殿様の屋敷では控えの間から、茶の間まで出入りできた家臣だ。喜衛門の妻は数年前に死んでいたし、お節様への同情も強かったに違いないんだ。二人の仲は宿命というやつだろうな。また殿様は二人の仲をうすうす知っていたんじゃないかな。それでなげりや、祭りの前の晩、庭に喜右衛門を見付けざま、斬りつけることはないだろう。」

## 第二幕

時—宝暦二年（一七五二）春。

所―桃生郡の黒森山、ソロミ山と翁蔵山に挟まれた谷川ぞいの女川村。山道から少し北側に入ったところにある飯田屋敷。四五〇石の領主の館としては大きく、屋敷前には集会所、屋敷内には庭と池があり、屋敷の後ろには木々が山に連なる。屋敷から一段下がった所に家臣の家の屋根が四、五軒見える。集会所の中央には侍の死体が横たわる。仙台から来た侍三名。蜂谷という年配の侍は床几に座り、何かと命令する。他の一人は筆記役。もう一人の役人と飯田家の侍とが死体の衣服を脱がせ、時々、臭いに鼻をそむけながら刀傷を検分する。下手に飯田家の隠居と家中の侍が数人。家の外には百姓衆が数人。(舞台の右手の片隅に仙吉と河庵がもみ療治を続け、その会話が舞台の話を補足する形をとる。)

仙台から来た侍、蜂谷六左衛門(五〇才台の思慮深い男)「本日は一日じゃ。拙者は昨夜に届けを受けた。それで夜中すぐ仙台を出て、未明から日中と馬を走らせ、夕方の方、到着いたしました。すぐ、御吟味を始める。よいな。」

家来一同「はは―」

蜂谷「飯田能登殿が切られなさったのは七日の夜、死亡は七日深夜から八日早朝ということになるう。家老、仙台への届けが六日も遅れたことは不届きであるぞ。なぜじゃ。」

飯田家家老「下手人は日塔喜衛門とはつきりいたしておると考えました。まず逃亡した喜右衛門と、ことによると一緒のお節様の二人を召し捕らえることを先にいたしました。四方に家中の者を走らせましたが、見付けることはできず、それで遅れが出てしまいました。お上には申し訳はございません。」

蜂谷「(隣の筆記役に)これは書かぬように。病死であれば届けは急が

ぬ。しかし奥方が逃走しては病死の甲いほできぬ。それで奥方だけでも、説得して、連れ帰ろうと計ったのではないかな。」

家老「滅相もございません。ただ逃げた者を捕らえようと。」

蜂谷「まあよい。ここからはまた筆記せよ。飯田のお殿様はお酒を召されて書院におられたことまでは分かっている。そばめら二人はお殿様が寝てしまったので、祭を見に行くと申しておる。そこへ日塔喜右衛門が書院わきの庭を通りかかった。たまたま目をさまされたお殿様が庭に出て、まず脇差しで斬りかかったものと思われる。妻・お節が喜右衛門に加勢いたしたかは分からぬが、まず死体の切り傷を検分いたそう。」

蜂谷「立って死体に近づく」「胸の心の臓のあたりに四寸の深手(ふかで)、これが致命傷であろう。額あたりに三力所の浅手(あさで)がある。右の手の指が四本切り落とされておる。左肩から五寸の深手、これは後ろからの袈裟懸けじゃ。左手首はまったく切り落とされ、左右の膝の肉が切られておるな。さて切り落とされた左の手や右手の指がないが。」

家老「これも庭の隅々まで探させましたが・・・」

蜂谷「大方、野良犬が啜えて持ち去ったのであろう。そちらもよほど動揺していたと見える。」

家老「面目、ございません。」

蜂谷「これが日塔喜右衛門が落としていった刀じゃな。血もついておる。(筆記役に)ここからは書くな。下手人は拙者・喜右衛門でござる」というのだな。刃こぼれがある。これ、お殿様の脇差を見せよ。これにも刃こぼれがある。家老、あの長押にかかっておる薙刀をみせよ。」(家来に薙刀をとらせる。蜂谷、鞘をとる。)

蜂谷「血はついておらぬ。しかし・・・(しばらく薙刀の刃を調べ

る。飯田の殿様の太刀はどこだ。」

家老「見つかりません。喜右衛門が自分の刀を捨てて、代わりに持ち去ったものと思われままする。」

蜂谷「ここからは筆記せよ。家老、喜右衛門もお節は傷を負った様子はないのじゃな。」

家老「書院やご寢所には血のあとはありませんでした。」

蜂谷「家老、お節様と喜右衛門の密通は知っておったか。」

家老「全くもって存じませんでした。」

蜂谷「(傍らの家臣へ) その方はどうじゃ。」

家臣「全くもって存じませんでした。」

蜂谷「(飯田能登の父親・隠居の庭楽軒へ) 隠居殿も、全くもって存じませんでした、でございますな。」

父親・日庭軒「はは、恐れ入ります。」

蜂谷「喜右衛門の家の者はどうしておる。」

家老「妻は数年前に死亡いたしました。父母がおりますので、座敷牢に入れております。喜右衛門の娘は病気でござりますが、喜右衛門の父母が座敷牢の中で看病いたしております。」

蜂谷「喜右衛門の父母に密通は知っておったかと聞いても、皆答えは同じであろう。子供が病氣とあれば、医師と薬の便宜ははかってやるように。まず、家中の者は二人の人相書きを描け。下手人は喜右衛門であろうが、逃げた二人は一緒であろう。主殺しの大罪

じゃ。」

仙吉「殿様の右手の指が4本も落ちたところをみると、殿様は脇差しで斬りかかり、喜右衛門が太刀で受けて、つばぜり合いになったのさ。喜右衛門には殿様を殺す気はねえ。防戦一方さ。その時、

殿様の右手の指が落ちた。額や頭に浅傷も受けた。そこへお節様が薙刀を持って現れた。お節様は、殿様の手首を切り落とすほどの気合いの入った一振りさ。そして暴れる殿様を後ろから袈裟懸け。足を払って、胸の深傷は心の臓をねらったトドメの突き傷さ。足を払うのは薙刀の技じゃあねーか。深傷はみんな薙刀のものだと俺はみるね。切ったのは喜右衛門じゃあねえ。お節様が出てきた後は一瞬の間さ。」

河庵「主殺しというより、夫殺しか。ところで、二人はどうやって逃げたのかな。」

仙吉「あとで分かったことだが、二人は翁蔵山の山道を通った。志津川から気仙沼まで山道ばかりを歩いたんだ。喜右衛門は金鉢さがしてこのあたりの山はくまなく歩いて知っていたんだ。浜の街道は人通りが多い。喜右衛門だけが昼に街道に出て、食べ物、草鞋なんかを買い、野宿をして夜に山道を歩いたんだ。お節様は嫁入りに着た小袖やかんざしを持って家をでた。」

河庵「逃げる途中で助けてもらった人たちに、お礼にとかんざしや櫛を置いていったんだな。」は

### 第三幕

所―陸前高田のヤクザ・藤七親分の家。藤七はヤクザだが、表向きは海鮮問屋をやっている。喜右衛門とお節は旅支度。夕暮れ、遠くに海の波音が聞こえる。

喜右衛門「御世話になりました。親分には女川村で人足を御世話いただいた時の御縁で泊めていただいたこととして下さい。」

藤七親分「それだけの話にして、行く先は南部の釜石の仁吉親分のと

ころへ行きな。こまかいことは言わねえ、聞かねえ。達者で生きのびてくだせえ。」

お節「御世話になりました。このご恩は決して忘れはしません。おかみさんに何かお礼のものと思っても、何もありませんが。」

藤七親分の妻「何もいらぬよ。それにしてもお二人様が不憫で、しかたがないよ。」と泣く。

仙吉「追っ手が同心二人、配下のお小人が三人、仙台を出たのが、十八日。女川村でおれが仮のお小人で加わった。始めはどっちの方角へ逃げたか、皆目わからなかった。それで始めは女川村、次は広淵宿へ移った。お節様が育った場所に近いこともあってここを探索した。それから柳井津、ここは二つの街道が交わる宿場だ。二人の行く先の手がかりは無かった。しかしここで有力な情報が入ったんだ。翁蔵山から下りた海に近い水戸辺の村で、一人の侍が握り飯を四月九日か一〇日の夜、旅の用にと作らせたというんだ。早速、追っ手は柳井津から水戸辺へ、それから志津川へ移動したんだ。志津川から気仙沼方面に逃げたに違いないと。」

河庵「そのときにや、二人はすでに気仙沼から高田、藩境を越えて釜石に。二人は南部領に入れば、逃げおおせると思ったんじゃあないかな。」

仙吉「追っ手が高田の藤七親分の家へ踏み込んだときは八月初め。もぬけの殻だったさ。」

(同じ藤七親分の家、季節は春。役人ら六人が乗り込む。)

追っ手の役人「藤七、ここに侍と武家の奥方が来て泊まらなかったか。」

藤七親分「そのような二人、一向に存知ません。」

役人「仙台からお手配がでておる。隠し立てをされるとその方たちも同罪じゃぞ。」

藤七親分「そういえば日塔喜右衛門という知り合いのお侍のご夫婦を一晚だけ泊めました。それが何かしたんですかい。喜右衛門様には北上川の堤防工事で人足集めをした縁だけ。それ以外は何も知りませぬ。」

(家の中にドスを腰帯に挟んだ子分や舟の櫂のような棒をもった男ら数人が現れ、役人たちを取り囲む。しかし役人はひるまない。)

役人(藤七に言い聞かせるように)「おぬしはお節様がお輿入れの前に妹分として入られていた花泉の大塚家で中間として働いておったろう。喜右衛門の人足集めだけの縁じゃあない。気仙沼での聞き込みで、藤七、お前の家に二人が数日いたと、調べはついているのだ。しかも藩境を越えるよう、二人を山道まで送り出したことまで分かっているのだ。お前は二人から、詳しいことは聞いてはおるまい。これは夫婦の旅でも、単なる男女の駆け落ちでもないぞ。二人は女川村の飯田の殿様を斬り殺して逃げてきたのだ。主殺し、不義密通の罪がいかに重いかくらい、お前も分かっているだろう。いずれ二人は必ず召し捕らえられる。お前が事の重大さを知らず、二人の逃亡に荷担したとあっては、お前も大きなおとがめを食うぞ。しかし今、ことを明かして我々に協力いたせば、かえってご褒美にありつけるようにしてつかわそう。」

藤七親分「主殺し、不義密通のことは聞いておりませんでした。心苦しいが、お話ししたいでしょう。」

#### 第四幕

所―山の中の小屋のような一軒家。歩くのがやっとなのお節と喜衛門を連れ、年老いた百姓一人が家の中に入る。

百姓「ばあさんや、山道で難儀をしていたお二人を連れてきたよ。」

百姓の妻「それはたいへんなことじゃ。どうぞお入りなされ。」

喜衛門「かたじけない。連れの女が、歩けなくなってしまう、そこに

通りかかったお方のご慈悲におすがり申した次第です。」

百姓の妻「さあさあ、遠慮はいらぬ。これはこれは、お足の指から血

がでている。洗って手当をせねば。爺さん、お湯を出して、お薬

を捜して下さい。」

百姓「昨日、仕留めた山鳥がある。それを煮て、お粥も作りましょう。」

喜衛門「お節様、お二人のお慈悲におすがりいたしましょう。しかし、

路銀が一文もないのですが。」

百姓「なんの、路銀などいらぬ。わしは西村と申す者。冬の間、炭焼

きと猟をしてこの山の中で過ごしております。ぼつぼつ、里へ降

りようと思っていた。ここにはだれもたづねてくる者などいない。

たまにこの辺りを通りかかるのは、金鉢を捜す山師が数年に一度、

通るくらいで、雪がまだ残る今は、通るのはキツネかウサギくら

いのもの。遠慮はいらぬ、何日でも休んでいきなされ。あなた方

は、多分、関所を通らず、藩境を越えようとされているのでしょ

う。理由はお聞きしません。知らない方がいいでしょう。わしら

は難儀されているお二人をお助けするだけです。「窮鳥(きゆううち

よう)懐(ふところ)に入(い)れば獵師(りようし)も殺(ころ)さず」

と言います。」

喜衛門「ありがたいことです。」

お節「地獄に仏とはこのようなことをいうのでしょうか。喜衛門、少し寝かせてください。」

(翌朝)

喜衛門「お節様、足の傷はどうでしょうか。」

お節「お陰様で、ずっと良くなりました。」

百姓の妻「まだまだそのお足では歩くのは無理です。もう数日、ここ

で休んでおきなされ」

喜衛門「ありがたいのですが・・・釜石には我らを泊めてくれる仁助

というお方がいるのです。」

百姓「仁助親分なら名前は聞いたことがある。歩けるようになったら、

わしが関所を通らず、藩境をけもの道で越え、里まで降りて、釜

石に行くまで案内してしんぜよう。吉浜まで降りて、海沿いに藩

境を越える道はあるが、それでは目立つ。」

喜衛門「私たちには、もう路銀もお札に置いていくものがない」

百姓「礼などいらぬ。お二人のお役にたてば。」

お節「ただ一つ、これをお上げしたい。というより、これはお二人に

ご迷惑になるかもしれぬ。ここまでこれだけ手放すまいと持って

きたが、南部藩領に入ることができれば、この衣装はいらぬもの。

お百姓様、この打掛は当分、だれにも見せず、しまっておいてく

だされ。お願いします。お札にもならない、むしろご迷惑になる

ものかもしれない。しかしお上げするものは、もうこれしかない

のです。」

百姓の妻「このような上等なお召し物、今まで見たことがない。おじ

いさん、なにかに包んで、隠してください」

河庵「南部藩領に仙台藩のお役人が入るにやあ、手続きが必要だ。そこで追っ手のお役人は、南部の関所と、仙台の方へとまた早馬を出したんだね。」

仙吉「そうだ。南部の関所からはすぐご許可がでた。しかし遠い仙台からは四日後のご返事さ。表向きは二つの藩ともに「主殺しは大罪、ぬかりなきように」とのご命令さ。しかしあとで聞いたことによ、このことが仙台の大殿様の耳に入り、内々のお言葉があったそうだ。「四角いところを、丸く探せ」とのお言葉だったそうだぜ。」

河庵「それはどういう意味で。」

仙吉「お節様は、先の大殿・吉村様の子供だとさ。吉村様、領内見回りの際、小野の富田様の山で鹿狩りをなされた。小野の富田様といえば、例の伊達騒動の時、幼君亀千代様の守り役で三百石だった。その後、亀千代様は大殿・綱村様になられ、富田様はドンドン拍子でご出世され、今じゃ二千石取りの殿様だ。次の大殿・吉村様にも忠勤を励んだんだろうよ。家来の娘で器量のよい娘を夜のご接待に差し出した。その娘が身ごもって生まれたのがお節様という訳なんだ。これも口説にや入れられない。」

河庵「なんだい、それじゃあ今の大殿様は先の大殿様の娘、つまりは腹違いの妹を引っ捕らえる羽目になっちゃったという訳ですか。幼い頃にはご一緒に過ごされたこともあったに違いない。四角い領内を丸くさがせとのお言いつけは、見逃せ、助けよということですかい。」

仙吉「そんなところだろう。だがそこは侍の世界だ。南部藩の許可がでたところを、もう結構ですと引き返す訳にはいくまい。南部領に八月半ばに入って、釜石まで。そこで高田の藤七親分から聞い

ていたぞと、釜石の仁助親分を詰問したんだ。」

河庵「二人はあそこで捕まったことになっていきますぜ。」

仙吉「そこが知らぬ者の言うことさ。ここから先は口説には入れらねー話さ。」

河庵「どこでどうして捕まったんですかい。」

仙吉「釜石の仁助親分は二人をさらに山奥へ送っていたのさ。そこは小国村という山奥の村なんだ。追っ手の我々は釜石で、そのあたりの山道に詳しい仁助親分の子分をお小人にやとって総勢七人で峠を超えた。もうあきらめて戻ってもよかったんだ。峠の茶店でお役人衆と休んでいると、小国村からきた薬売りがうわさ話をしていた。何でも小国村では、田んぼを広げたいが水が足りない。そこへ仙台から来たお侍が川の上流に作った堰から水を引くことを教えたそうさ。それから村をあげてその工事を始めた、というのさ。」

喜右衛門は北上川の堤防工事や田んぼの用水工事に詳しいはず。俺たちは、目配せして黙って出発した。小国までの山道は遠かった。喜右衛門もお節様も、ここまで来ればもう大丈夫と安心していったと思うぜ。もう女川村を出て、四月もたっていたんだ。小国の村はずれに着いた時には、みんな足が棒になっていたぜ。」

## 第五幕

所—小国村の肝入り(村長)の家の庭。遠くに高く早池峰山が見える。百姓衆が休んでいる。まわりには土を運ぶモッコや土を掘る鋤や鍬が並ぶ。遠くに鳥がさえずる声。村長が百姓らに言う。

村長「皆の衆、お疲れだった。小国川に堰ができ、水が家々をまわり、



田んぼを潤す水路の工事にもようやくめどがついた。まったくあの喜衛門様のご設計どうりじゃ。来年の米の収穫は今年をはるかに超えようぞ。それに奥様は村の娘達や子供を集めて、針仕事や手習いを始めて下さった。ありがたい事じゃ。あのお二人は「村にとっては大恩人じゃ。」

村人の一人「皆の衆、昨夕、おれはへんな噂を耳にした。仙台から十手・取り縄の連中が釜石からこの村へ向かっているちゅうだ。こによるとあのお侍と奥方を召し捕りに来るんじゃないか。あのお二人がここに来たには、もともと何か深い訳があるのではないかと思っていたが。」

村長「おいお前、お二人を呼んでこい。場合によっちゃあ手助けできないこともない。」

(しばらくして二人が現れる。)

村長「お侍様、ここは山の中、ご覧の通り、早池峰山やそれに連なるどの山々もおれたちにとっちゃあ、家の庭のようなもの。堰の工事は始まった。仙台から追っ手が来たらしい。訳は聞かねえ。お二人ですぐ奥の山へ逃げてくたせえ。食べ物運ぶこともできる。村の衆、お二人を追っ手に差し出す訳にはいかねえだろう。」

百姓ら「そうだ、そうだ。」

喜右衛門「どうするお節様」

お節「私はこの辺でお縄をいただいて、もう十分と思います。斬り合いをして、村の方々に迷惑はかけられませぬ。皆様に大変ご親切にいただきました。この地は私ら二人にとって極楽でした。ここでおとなしくお縄を受ければ、追っ手のお役人のご面目もた

ちます。あなた様はどう思いますか。」

喜右衛門「拙者にも異存はございませぬ。」

百姓衆「逃げてくたされ。早池峰山の麓にはお堂がある。そこへ食べ物運ぶ。どんなことが仙台であったかは知らねえ。しかしお前さまがたが悪い人でないことは、俺たちには聞かなくなつてよく分かる。」

百姓ら「そうだ、そうだ。」

(しばらくして、そこに刀をさげた侍数人と手下の男ら七人が来て、二人を取り巻く。侍の一人が用心深く喜右衛門とお節の前に進む。)

役人「日塔喜右衛門と飯田節、仙台から捕り手を下知されて参りました。事情はここでお話するまい。おとなしくお縄を受けていただけまいか。」

喜右衛門とお節「謹んでお縄をお受けいたしまする。」

仙吉「その時、お縄をかけたのがこの俺よ。じたばたしないっていうのがあの時の二人さ。二人は四月と十日、小国で暮らしたんだ。他領の山奥、ここまできれば、もう安心という気持ちだったんじゃないかな。」

おれは仙台まで馬の上の喜右衛門と竹駕籠に入ったお節様の見張り役さ。遠野へでて、釜石街道を西の水沢へでた。釜石から海沿いの街道を下ったのでは、この事件を知っている見物人が多くて面倒だ。それで反対の水沢から仙台へ向かった。こちらの方を通ったが、それでも見物人が多かった。そのころにや事件のこととがうわさ話で広がっていたんだ。二人に同情して、中には食べ

物を差しあげたいという村人も来た。お役人も同じさ。斬り合いにならず、手柄を立てた上に、二人には逃げる様子はない。お役人方もすっかり同情しちやってな。立場つてものがあるうから、飯のお小人・仙吉が勝手にやったことにして、村人が持ってきた食べ物、喜右衛門の縄をゆるめて食べさせたり、竹駕籠の中のお節様へ差し入れたりした。俺の一存で、小野宿の宿屋では、二人を一緒にさせてやったよ。ついたての外で俺は一応、二人の見張りと、居眠りを決め込んだのさ。」

河庵「なにか二人が言っているのが聞こえたかい。」

仙吉「二人は、峠を越えた時の西村夫婦の親切が忘れられない、そして小国村に来てからは、そこが極楽だったと言っていた。ただお白砂での取り調べのことで、お節様は喜右衛門にこう言っていた。三〇年もたったことだ、もう話してもいいだろう。」

## 第六幕

所—小野の宿。鳴瀬川を舟で渡る前、昼、宿に着き、二間に分かれて休息している。役人らと縛られた喜右衛門・お節が分かれて部屋にいる。一人のお小人（若い頃の仙吉）は二人の見張り。役人たちの部屋に宿の者が来る。

宿の者「小野宿の富田様のお使いの方が来られました。」

使いの者「お役目、ご苦勞様です。富田様が皆様にと夕餉の膳をお持ちいたしました。」

役人「それはかたじけないことでございます。」

使いの者「主人が申すには、お役人の方々に膳の中身をよくよくご検分していただき、だれか病人がいたら、こちらで引き取るのとのお

ことづてでございました。」

役人「我々一行は七名、膳は九つ。お節、喜右衛門にも食べさせよということじゃな。（お小人に）では膳を二つ隣の部屋へ運べ。」

役人（隣の部屋に来て）「縄をゆるめてよかろう。（膳を見て）鴨（かも）の肉の煮物と、菜だな。検分せよとは、病気の者とは、はて何のことだろう。」

お節「ホホホ、富田の父上らしいなぞかけじゃ。なつかしい。お役人様、紙と筆をお貸しくだされまし。」

役人「よかろう。手の縄をゆるめてつかわそう。」

お節（さらさらと筆で何かを神に書く。）「ではこれを富田の殿様へ。」（皆が夕餉にかかる。）

（夜になって、二人は縄を解かれ、仙台に入る前の一夜、話し込む。見張りの仙吉は居眠りの様子。）

喜右衛門「富田の殿様は、お役人の方々に膳の中身を検分せよとは、

どんな訳でそのようなことをおっしゃったのでしょうか。」

お節「義理の父は私を助け出そうと計ったのです。お節は病気で、富

田家で看病しておる。評定所では、喜右衛門が一人で能登様を切り、お節は無理矢理連れ出された。父なら評定所をそのようにもっていくでしょう。それがだめなら、お節は病気で死んだことにしてしまう。役人への謎かけは「かも・な、かまうな、お節を病気にして渡せという意味なのです。」

喜右衛門「それはむずかしい謎かけです。富田の殿様には何と書いて

送られたのですか。」

於節「私は父に和歌を二つ送りました。「桃生なる小野に育ちし鴨な

れば 飛びたちかねつ名の惜しければ」 父とはよくこのような歌のやり取りをしたものです。万葉集の山上憶良の「世の中を憂しとやさしと思へども 飛び立ちかねつ鳥にしあらねば」の和歌からすぐ浮かびました。もう一つの歌は、そなたと私の名前を詠み込みました。「きえもせず菜に添うことをかなえたり せつなき鴨に悔いは残らじ」 私は縫物をしているときも歌詠みをしていて、退屈はしないのです。」

喜右衛門「馬の上で拙者は辞世の歌を作りました。「もろともに消えにしあとは濁らまし 長き来世は清き流れを」 小国川の堰の水の流れを詠んだものです。」

於節「それを二人で一つの辞世の歌としましうぞ。」

喜右衛門「小国の堰、水が流れ続けるかぎりお百姓衆は、私たちのことを忘れないでしょう。逃げる道筋の方々は皆、私たちに親切にしてくれた。」

お節「お侍の方々も、表向きはお縄をかけて仙台まで護送してはいるものの、内心は皆、我ら二人に、味方してくれている。それが痛いほど分かるのです。」(一時、静寂)

お節「喜右衛門様、あの夜、殿様があなたに斬りかかりましたね。」

喜右衛門「殿がお怒りになったのは当然です。私は侍といっても仕事は田畑を作ったり、水路を作る土木工事ばかりでした。真剣で戦うことなど、子供の頃の軍記物で聞かされただけです。そして主人に忠義を尽くすことこそ武士の道と教わりました。しかし私は夢中で刀を抜いていました。殿に刃向かったのです。いっそあの時、私が切られておれば、お節様は無事だったのです。」

お節「喜右衛門様をこのような事件に巻き込んでしまったのは私です。」

喜右衛門様がお働きになるのを傍らから見てることが私の生き甲斐でした。そなたを見るのが私の唯一の喜びとなり、これが私の生涯一度の恋でした。薙刀を振るったのは、そなたを助けたい、その一心でした。」

喜右衛門「お殿様も思えばおかわいそうな方でした。小姓頭までご出世のための賄賂や追従が横行しています。殿様がお城勤めを投げ出したのも分かるような気がします。」

お節「殿様は女川村にもどると、花鳥風月の世界にのめり込みました。それでも決してそれで満足されたと言っわけではなく、お心の虚しさを忘れさせてくれるものがそばめとお酒でした。私はそれを分かっているながら、殿様の酒宴の輪に入ることはできませんでした。」

私は針仕事と薙刀が得意です。私は薙刀を持つとき、いつも「母の敵」と心の中で叫ぶのです。その敵とは喜右衛門、だれのこととお思いですか。…母の敵とは先の大殿、吉村様のことなのです。私は吉村様の子供なのです。母は富田家の乳母として私を育ててくれました。私が人のうわさを耳にして、乳母に問いつめた時、乳母である実の母がすべてを私に打ち明けてくれました。

義理の父・富田様は、母を殿様に差し出したことを悔やんでいたと思います。いつも私にはやさしかった。義理の祖父は綱村様のもとでトントン拍子にご出世なさり、吉村様の代になると逆に富田家には風当たりが強くなった。吉村様への忠義に無理があったのでしよう。私には富田様より吉村様、つまり大殿様が憎かった。

私が薙刀の稽古に励んだのはその頃からでした。「にくい、に

く「の一心で薙刀を振るうとき、私の薙刀には殺気があると言われまして。脛宛に私の薙刀が当たると、相手の脛は腫れ上がったものです。剣道指南役の方々さえ、私を相手にすることをいやがりました。私は最後の深傷を殿様に負わせた時、実は大殿を殺したつもりでした。夫の殿を切り、次いで母の敵・大殿を切り、そして自分の宿命も切ったのです。評定の場で、お役人は、お節は関わりない。喜右衛門が殿様を切ったということにして、私の命を助けようとするかも知れませんが。喜右衛門様、あなたは必ず重罪に処せられる。私はそれにお供します。

喜右衛門様はあの夜、薙刀の血をぬぐって鞆をかぶせて長押（なげし）に掛け、自分の血塗りの太刀をあそこに残しましたね。しかしお節は命ながらえより一緒に死にたい。」

喜右衛門「・・・私には、逃げた日々と小国村での日々で十分でございます。ただ、・・・」

お節「ただ、なんじゃ」

喜右衛門「ただ拙者の老いた父母と娘への処罰が・・・」

お節「主殺しは武家の社会にはあつてはならぬ重罪、きびしい処罰が親類縁者にまで降りましょう。大殿様、殿様はいくら悪いことをしても、おとがめはない。刑罰は下の者ほど厳しく作られている。ひどいことじゃ。人が作った仕組みが人を苦しめるのじゃ。むごい、むごいことじゃ。」（泣く）

仙吉「俺が聞いたところじゃ、一関の近くの東山村出身の芦東山というらしい学者がいた。この学者が十三歳の時、母親に連れられて仙台に行き、仙台見物をして躑躅が岡の釈迦堂に行ったときよ。その釈迦堂のいわれを書いた石碑の漢文をすらすら読んで母親

に聞かせたそう。それを見ていたある商人が、この子はいなかに帰すのは惜しい。引き取って仙台で学問をさせようと、母親に掛け合ったそう。それが後に仙台の学問所のご教授になられた。しかしご教授になったとたん大殿・吉村様の怒りを買って首にされちゃった。東山が、学問所の生徒の席順を身分・石高でなく、年齢の順にすべきだと吉村様に申し出た。吉村様は激しくお怒りになられて、東山を免職され、加美郡の宮崎に永蟄居させた。しかも自分が死んだときの恩赦でも、東山だけは除外せよと遺言されたそう。その学者は五年前になくなったばかりだ。」

河庵「それでも吉村様は名君と言われている。」

仙吉「それがお節様のお父上だ。」

## 第七幕

所—仙台寺町にある遍照寺の焰魔堂の前。評定の結果、二人は武士の身分を剥奪され、お節は七北田にて磔の刑が、喜右衛門には芭蕉の辻にて三日間の晒しと、のこぎり引き、七北田にて磔の刑が言い渡された。牢の中ですでに五十日がたっていた。

判決がでた数日後、お節は、後ろ手に縛られ竹駕籠に乗せられ、市中を引き回され、七北田の処刑場へ向かった、その行列が寺町の遍照寺にさしかかる。そこでお節は寺の境内にあるお手水の脇にいた仙吉に気づく。

お節「お役人様、お願いがございます。末期の水をここで飲ませてくだされませ。」

役人「末期の水は七北田の手前の笹竹不動堂で飲むと決まっております。」

お節「私にはお願いとて他にありません。ご処刑の前のたった一つのお願いです。ここで末期の水を飲ませてください。」  
役人「よいだろう。」

お節をのせた竹駕籠がお手水に近づき、手下が柄杓で汲んだ水を駕籠の窓から後ろ手にしぼられたお節に飲ませる。お節はそこでそばにいる仙吉に声をかける。

お節「仙吉さん、この胸に入れてある巻物をあの焰魔堂の中へ投げ入れて下され。お役人さま、この巻物は私が牢屋で帯に縫った曼荼羅でございます。処刑場には不向きなもの。この者にあのお堂の中に捨てさせていただきます。」

仙吉、小声で「お節様。喜右衛門様は芭蕉の辻に生き埋めされておりますが、だれものこぎりを引くものは現れません。皆、手をあわせて拜んでおりました。」

お節「かたじけない。お礼を申します。」

仙吉「おれはあとで寺の和尚様に聞いた。あの巻物は帯に阿弥陀如来を刺繍したものだ。飯田の殿様、喜右衛門の家族、いろんな人々にわびる気持ちで縫ったんだらう。和尚はそれを軸物にして残すと言っていた。」

河庵「そうかい、めくらの俺には心の中でよく見える。立派な曼荼羅だろうな。」

仙吉「口説のことだが、小国村のことは入れられねーぜ。なぜかと言えば、小国村で堰を作って村人衆があがめる喜右衛門を、仙台藩でお仕置きしたんじゃあ、仙台藩の立場がねえ。口説の中じゃ、

喜右衛門は極悪人で、南部藩領の釜石のヤクザの家で捕まったということなくはいけないんだ。それに飯田の殿様の評判が悪くて、お節様にも同情が集まっている。二人への同情が強くなればなるほど、仙台藩の評判は下がるじゃないか。」

河庵「大殿様もつらいところよ。主殺しはお侍の世界で、見過ごしにはできない罪だ。処刑するには我が妹だ。」

仙吉「お白砂でお節様は、大殿様は自分が切った。喜右衛門様は殿様が切りかかったのを避けるため、つばぜり合いになっただけ。しかし私は斬り殺すつもりで切りました。その時は、大殿様を切ったつもりでした」と言ったそうだ。お役人があわてて、「それは大殿様でなくてお殿様であろう」と聞き直したそうだ。お節様はにっこりと笑って答えなかったそうな。」

河庵「二人以外への処罰はきびしかったな。」

仙吉「喜右衛門への処罰が一番きつかった。お節様は喜右衛門の殺害現場に居合わせ、喜右衛門に従って出奔し、斬殺には荷担しなかったとされ、それでも磔。お節様が嫁入り前に妹として入った花泉村の大塚家の義理の兄・大塚伊豆様はお役ご免。何の罪もないのによ。しかし元禄の頃までは、主殺しには家族も皆、死罪だったというから、お役ご免は軽い方かな。お節様には娘がいたが、何のお咎めもなかった。」

河庵「もちろん、小野の富田様にも、大殿様にもお咎めなし。こりゃあ不都合だぜ。もとはと言え、さきの大殿様・吉村様、自身もまた種じゃあねえか。」

仙吉「日塔喜右衛門の父は土分を剥奪、田代島へ流罪、母も土分剥奪、下働きをする奴（やつこ）にされた。娘は事件のあとすぐ死んだので、お構いなし。飯田家の家老二人は解任、閉門。家来らとこ

隠居は届けが遅れ、事件を未然に防がなかった故で、蟄居の処分を受けたんだ。逆に、藤七親分にはご褒美のお金がかぐだされた。有力情報を知らせた検断、肝入や乞食頭にはご褒美のお金が届けられた。」

河庵「口説の最後だが、どうすればいいだろう。」

仙吉「そうだな、聞いている衆はこの事件のお裁きが、上に軽く、下に重いことは分かっているんだ。しかしこの口説が繰り返して語られても、お上からおとがめが入らないことが肝心だ。口説の最後には、飯田家が切られて死んだ殿様の妾の子に、領地を半分にして、お家が続くようにと寛大なご処分になったことを、逆にほめ言葉で結んでみたらどうだろう。それがお上へのほめ言葉でないことは聞いている衆には分かるんだ。お上の物差しは杓子定規だから、言葉でほめておぎゃあいいんだ。お上に都合のいい物差しは、二人に同情する村人の物差しとは違う。」

河庵「ヤクザの物差しもまた別だろう。」

仙吉「違くない。ハハハ。口説の中じゃ、三つの物差しがつばぜり合いさ。しかし強そうだったが、一番始めに折れたのはヤクザの物差しだ。お上の物差しの方が強かった。一番弱いが、正しいのは庶民の物差しだぜ。その庶民の物差しを育てるのがお前の口説だぜ。」

河庵「おれは必ずこの口説を完成させるぜ。」

仙吉「不義密通するのも、娘をはらませたり、側室を何人も持つのも本当は同じ罪のはずだ。いもせの道に身分や家柄がないと最初にさりげなく入れよう。人の世の中、いつになりゃ、身分・家柄の差別が消えるんだろう。」

河庵「いつかいつかで、人の短い寿命は終わりだ。しかし小国村での

四月ばかり。あれは二人にとつちやあ、十分に長かったろう。長い短いの物差しも、仏様から見たら、百年でも短く、四月でも長いんだろうよ。思い切ったことをしたお節、喜衛門の二人が本当は月日という物差しを超えていたんだろうな。」  
(ここで再び口説が流れる。)

(終わり)